

群盲象を評す（出典: フリー百科事典『[ウィキペディア \(Wikipedia\)](#)』）



この寓話を元に彫られた壁絵。タイ北東部。

群盲象を評す（ぐんもうぞうをひょうす、群盲評象）は、数人の盲人が象の一部だけを触って感想を語り合う、というインド発祥の寓話。世界に広く広まっている。真実の多様性や誤謬に対する教訓となっているものが多い。盲人が象を語る、群盲象をなでる（群盲撫象）など、別の呼び名も多い。

その経緯ゆえに、『木を見て森を見ず』と同様の意味で用いられることがある。また、『物事や人物の一部、ないしは一面だけを理解して、すべて理解したと錯覚してしまう』ことの、例えとしても用いられる。

あらすじ

この話には数人の盲人（または暗闇の中の男達）が登場する。盲人達は、それぞれゾウの鼻や牙など別々の一部分だけを触り、その感想について語り合う。しかし触った部位により感想が異なり、それぞれが自分が正しいと主張して対立が深まる。しかし何らかの理由でそれが同じ物の別の部分であると気づき、対立が解消する、というもの。